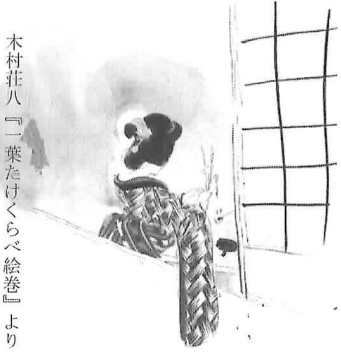


木村荘八『一葉たけくらべ絵巻』より

樋口一葉・その文学と生涯

貧しく、切なく、いじらしく

本展編集　中村　稔

（詩人、日本近代文学館名誉館長）

樋口一葉はわが国で初めて文筆で一家の生計を立てることを志した女性である。その生涯で 21 篇の短編小説を発表、「たけくらべ」「大つごもり」等、わが国文学史上不朽の名作を遺し、夭折した。享年24歳8ヵ月であった。

女子に教育は不要という母の方針により 12 歳で学業を諦め、以後殆ど独学。明治 22 年、父則義が負債を残して死去。それまで比較的裕福に暮らしてきた一家は困窮、戸主であった一葉は母、妹の三人家族を養う責任を負うこととなった。

明治 19 年、中島歌子主宰の「萩の舎」に入塾、橘千蔭の系譜に連なる桂園派（旧派）の和歌を学び、その歌才に属目され、約 2700 首の和歌を残したが、近代短歌の評価としては見るべき作は乏しい。
萩の舎の姉弟子、田辺（三宅）花圃が小説『藪の鶯』を刊行し 33 円余の収入を得たことに刺激され小説家を志した。

当初は新聞小説記者半井桃水を師とし、後には平田禿木ら「文学界」同人と交友をもったが、始終、衣類等の質入れ、家財等を売り、売れる限りは売り尽くし、借りられる限りの相手からは借り尽くす、といった辛酸を嘗めて生涯を送った。初期作品では筋立ての趣向を重んじ、美文で飾ったが、晩年は社会の下層に貧しく、切なく生きる女性たちを赤裸々に、しかし、共感をもって描ききった。

社会に貧富の格差がある限り、また、女性差別がある限り、一葉の作品は読みつがれるであろう。この展観はそうした一葉の文学と生涯を展望しようとするものである。

佐藤義亮が 18 歳で新聲社（新潮社の前身）を立ち上げ、雑誌『新聲』第 1 号を世におくり出した明治 29（1896）年。前年からこの年にかけて、樋口一葉は『たけくらべ』『にごりえ』などの名作をやつぎばやに発表した。特に『たけくらべ』が森鷗外や幸田露伴の賛辞を得、その名を不朽のものにしたが、同年結核にて 24 歳で死去した。

本展では、東京都駒場の日本近代文学館の協力により、第 1 部「一葉文学の世界」、第 2 部「貧困の深淵から小説家へ」、第 3 部「一葉をめぐる人々」の三部構成で樋口一葉の文学と生涯を紹介する。

主な展示資料

第1部　一葉文学の世界

「大つごもり」未定稿B
「たけくらべ」原稿（日本近代文学館寄託資料）
「たけくらべ」未定稿 E
「にごりえ」未定稿 A
雑記（感想・聞書 8）明治 27
星野天知　樋口一葉宛はがき　明治 28.1.22
平田禿木　樋口一葉宛封書　明治 28.2.13
「文学界」24 号　明治 27.12「大つごもり」初出
「文学界」25 号　明治 28.1「たけくらべ」初出
ほか

第2部　貧困の深淵から小説家へ

「経つくえ」未定稿 A・B
「ゆく雲」未定稿 A
雑記「しのふくさ」[明治 23.5～9]
雑記「やたらつけ」[明治 25]
雑記「はな紅葉一の巻」明治 29
三宅花圃（田邊龍子）樋口一葉宛はがき
　明治 25.12.24
伊東夏子　樋口一葉宛封書　明治 26.4.5
「武蔵野」第1編　明治 25.3「闇桜」初出
ほか

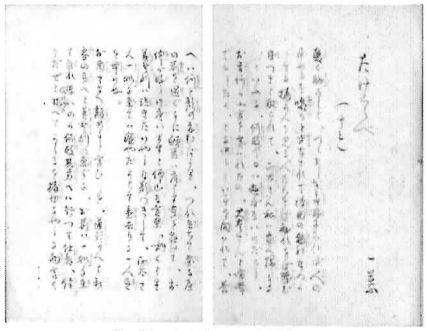
第3部　一葉をめぐる人々

樋口一葉　半井桃水宛封書　明治 25.3.10
半井桃水　樋口一葉宛封書　明治 25.12.7
馬場孤蝶　樋口一葉宛書簡　明治 29.2.4
戸川秋骨　樋口一葉宛はがき　明治 27.12.20
斎藤緑雨　樋口一葉宛封書　明治 29.10.3
『校訂一葉全集』明治 30.6　博文館
幸田露伴『一葉全集』序文原稿
島崎藤村「（たけくらべ）序」原稿
ほか

そのほか

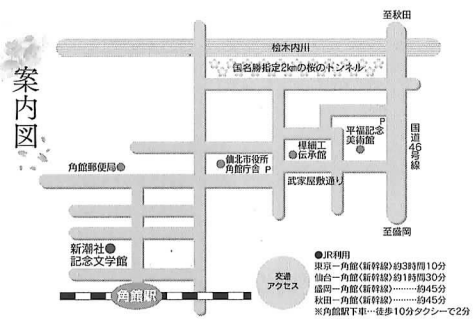
遺愛の文机と文具（硯石・筆立・水差し）
薩摩焼絵皿（兄虎之助作・東海道宿場絵図）
木村荘八『一葉たけくらべ絵巻』　講談社
鏑木清方『にごりえ』画帖　美術出版社

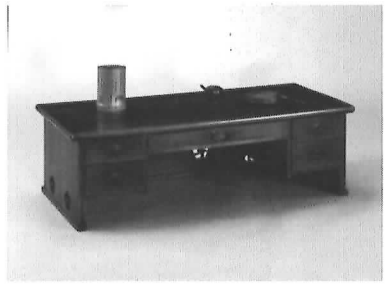
①樋口一葉肖像



②「たけくらべ」原稿

③『たけくらべ』初版本





④遺愛の文机と文具　　①③④は日本近代文学館所蔵、②は日本近代文学館寄託

新潮社記念文学館　〒014-0311 秋田県仙北市角館町田町上丁 23 仙北市総合情報センター内　電話番号 0187(43)3333